

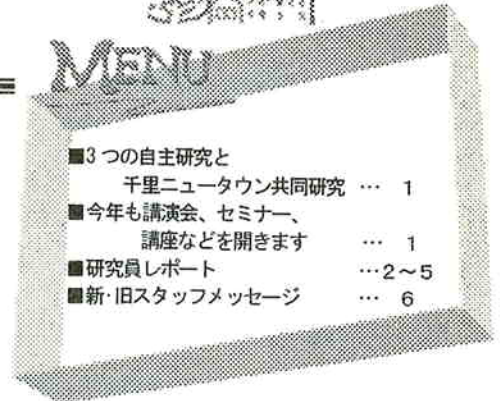
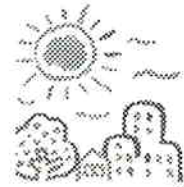
市政研究所だより NO,14

豊中市政研究所 TIMR (The Toyonaka Institute for Municipal Research)

〒561-0802 大阪府豊中市曾根東町3-7-1

TEL:06 (6862) 2290 FAX:06 (6862) 2292

ホームページ: <http://www.tctt.zaq.ne.jp/timr> E-mail: timr@tctt.zaq.ne.jp



今年度の取組みが決まりました

◆3つの自主研究と

千里ニュータウン共同研究

4月6日に第1回、また6月21日に第2回の理事会を開催し、今年度の事業計画が決まりました。3人の研究員の研究テーマは次のとおり決まりました。公募による新メンバーの弘中研究員を加え実りある成果を目指したいと張り切っています。テーマに関心をお持ちの方々のご意見やご協力をお願いします。テーマはいずれも仮題ですが、研究のねらいや進め方の詳細は、今後紹介していきます。

市民活動を促進する条例の類型比較 ー地域コミュニティ再生のためにー	太原 敏 研究員
廃棄物に関する意識・行動調査 ーライフスタイルの視点からー	村上 馨 研究員
低所得者に対する 経済的支援策の現状と今後のあり方について	弘中 伸明 研究員
共同研究 千里ニュータウンの新たな展望と評価	企画調整室 市政研究所

はじめまして

研究所スタッフです



(研究所入口階段にて)

太原 敏 (研究員)	平尾 和 (事務局長)	弘中 伸明 (研究員)	水田 良美 (事務局)	洲浜 智美 (事務局)	村上 馨 (研究員)
---------------	----------------	----------------	----------------	----------------	---------------

◆ことしも講演会、セミナー、講座などを開きます

今年度の講演会は、パネルディスカッションとして「IT革命」といわれる流れについて、地域社会や生活への影響やその「光と影」にも迫れればと準備中です。

また、昨年から研究結果などを素材にして、職員や市民のみなさんとの幅広い意見交換ができる場を持ちましたが、今年も開きます。講演会のテーマや現在進行中の研究に関連させながら、開いていければと考えています。ちなみに、昨年度の研究では「IT産業振興、財源安定確保」「地域小売商業と生活者、中心市街地と消費者」「廃棄物問題と地域での人や情報の流れ」などが話題になりました。日程が決まりましたらご案内しますが、進め方などアイデアがあった時はぜひご連絡ください。

『IT 産業振興 “とよなかモデル”』 — 税収の安定確保に向けて —

1. 問題意識と調査目的

バブル経済崩壊、既存産業の衰退、大阪国際空港国際線の移転、阪神淡路大震災、住民税減税などにより近年歳入の大幅な落ち込みが見られる。従来、豊中市は住宅都市として個人市民税を中心に安定した財政基盤のもと、都市インフラ、教育、福祉などの分野において質の高いサービスを提供してきたが、少子高齢化による生産年齢人口の減少、年金生活者の増加、既存産業の衰退、女性ワーカーの増加など、今後の豊中市をとりまく社会経済環境を踏まえるならば、地域産業振興、独自の地域産業政策による税収増、安定財源の確保を考える必要がある。本研究では、豊中市にふさわしい新しい成長産業の創出、支援策のあり方を、具体的施策事例を含めて提示した。

2. 研究体制と調査研究の方法

本調査研究は、研究委員として小長谷一之氏（大阪市立大学）、小早川謙一（豊中商工会議所）の指導助言をいただき、商工労政課、企画調整室、納税管理課各職員の研究会への参加・資料提供を受けた。統計データ、各種行政資料から豊中市における税収、産業の現状と課題を把握し、既往研究の調査、先進事例実地調査、市内実地調査を行った上、研究会で具体的方策を検討した。

3. 調査結果

■業種別法人市民税の推移、事業所数の変遷などの統計データからは、産業の構造変化、既存産業の衰退が読みとれる。サービス業は、法人市民税、事業者数ともに増えているが、詳しい業種は統計からは分からない。豊中の立地特性や、その産業の持つ特性から、今後、成長が期待される IT 産業の振興による地域経済活性化が住宅都市「豊中」にふさわしいと考え、先進事例、市内実地調査にも取り組んだ。先進事例の調査では、和歌山市、川崎市、相模原市における新産業支援施設の見学及び施策のヒアリングを行った。市内実地調査

では、豊中駅前、緑地公園駅前のテナントビル空き状況、賃料などを調べた。

■【豊中市における IT 産業振興のメリット】

- ① IT 産業は住宅都市になじむ。（無臭、無騒音、無公害）
- ② IT を用いた新産業は大掛かりな場所や設備を要しない。（低開業コスト）
- ③ 女性、高齢者、障害者の雇用に貢献する。
- ④ 地元資源の活用（大学、研究機関、ハイタレントな市民など）がはかれる。
- ⑤ IT 産業振興は既存産業の支援にもなる等々

■今回の調査研究では、組織的、時間的な制約もあり、市内産業の実態把握不足や、IT 産業振興 “とよなかモデル” について具体的な構想を提言できるところまで到達していないが、今後、関係者が議論する上で参考になるように、モデル検討にあたっての基本的考え方やモデルの基本項目について提示するとともに、具体的な政策事例として SOHO、ベンチャー育成支援実験施設プラン（案）を提示した。

本研究は財源確保の視点で取り組んだが、地域産業政策は財源確保のみならず、次世代の『地域』のあり方に関わるテーマでもある。（太原）



（視察先の川崎にて）

「地域社会に求められる生活支援システムの再構築～豊中・都心ゾーンを対象に～」

＜研究の背景＞豊中市は成熟期を迎え、住宅を中心とした市街地の更新が課題であるとともに、人口減少と少子・高齢化が進行している。今後の住み替えや住宅更新を考える場合、住宅供給量などのマクロな視点に加え、供給された住宅にどのような世帯が居住し、また住み替えているかという住民一人一人の生活に着目するミクロな視点、その双方から現状のメカニズムを把握することが必要である。

こうした問題意識の下、平成 10、11 年度に住宅の変化と家族・居住者の変化について、「豊中・都心ゾーン」地域と千里ニュータウン地域を中心に調査し、居住者移動と住宅市街地更新の関連・メカニズムのいくつかを明らかにすることができた。¹⁾

今年度の調査研究では、こうしたメカニズム・市民の行動形態がいかにして選択されるのかという点についてテーマを設定した。

豊中市が生活しやすい、魅力的なまちであるか、又はあり続けることができるかという点について考えたとき、目の前にある豊中の中心市街地活力低下の著しい状況が想起される。かつて中心市街地に集まっていた人々のエネルギーが今は拡散しているとすれば、かつて人々のエネルギーが集まっていたということは、中心市街地に行けばその人の目的が達せられた、あるいは獲得するものがあったと読み替えることができる。

こうした「生活支援システム」を担ってきた登場人物の一つとして、中心市街地の個人商店に焦点を絞り、豊中・都心ゾーン地域をケーススタディとして、今後の展望を探った。

＜研究の方法＞生活者（消費者）が個人商店に何を期待しているかは千差万別であるため、調査者側があらかじめ用意した選択肢を回答してもらうのではなく、設定されたテーマ、あるいは発せられた問いかけに対して自由に発言してもらい、場合によってはそれをきっかけにディスカッションするという方法をあえて選択した。統計に現れる買物行動を支える生活者（消費者）の意識・事情や、これまで行政・商業者が気にも留めていなかった点を探るには、このような生活者（消費者）とのコミュニケーションを通して

生の声を集める必要があると考えたからである。

インタビューは、日常の買物行動の実態とその理由、対面販売への意識、地域の個人商店に求めることなど生活者の声と、豊中・岡町駅前へのアクセスや都市環境など中心市街地としての機能について、若者から高齢者まで各属性ごとに 5～6 名のグループ単位で各回 2 時間程度行った。（全 48 名）

＜研究体制＞豊中市政研究所と PPI 計画・設計研究所の共同研究として、鶴坂貴恵氏（(財)大阪中小企業振興センター経営支援課長兼小売商業支援課長）、三好庸隆氏（PPI 計画・設計研究所 所長）、近藤秀樹氏（同研究所研究員）、に私を加えたメンバーで研究会を重ねた。また、拡大研究会を開き、石原武政氏（大阪市大商学部教授）、大橋賢也氏（㈱プランニングコンサルタント代表）にアドバイスを仰いだ。（所属・役職は当時）

＜研究のまとめ＞これら「生活者の声」から、①地域小売を取り巻く状況 ②そういう状況下でも地域の生活者（消費者）が支持している商店の存在とその支持の理由 ③中心市街地として豊中・岡町駅前に期待する機能 など、自らを取り巻く構造の変化に戸惑いながらも求められる機能を試行錯誤している個人商店にとっての明日の行動のヒントあるいは行政施策検討の刺激となるいくつかの点にまとめることができた。

＜今後の課題＞今年度の研究は、市民とのコミュニケーションを通じて問題意識を共有し、個人商店主や市職員が気づかなかったこと、ヒントや刺激的なエピソードなど、貴重な素材を集めることができた。この研究を生かすには、これら貴重な素材をこれとできるだけ加工せずに、個人商店主や市職員に伝える（ぶつける）作業が不可欠であり、今後の課題であると認識している。（藤家）

¹⁾ 「住宅市街地更新と居住者変動に関する調査研究(1) (2)」平成 11 年、12 年 豊中市政研究所

廃棄物に関する意識・行動調査(1)ーライフスタイルの視点からー

1. 問題意識と研究の目的

ごみの分別やリサイクル行動においては、近所づきあいや自治会等の監視・規制力が大きな役割を果たすことが指摘されている。一方で、地縁・血縁によって結びついた伝統的なコミュニティが弱体化していると言われている。

豊中市の自治会組織率は 58.6%にとどまっている(平成 12 年 4 月時点、市民生活課把握分)。『豊中市における地域コミュニティに関する基礎調査』(平成 11 年、豊中市政研究所)でも、自治会に対する市民の関心はやや薄くなりつつある一方で、ボランティアな市民組織に対する参加意識の高まりが見受けられることが分かった。

このような状況下の豊中市において、これらのつながりを持つ人はごみについてどのように感じ、行動しているのだろうか。

平成 12 年度は、この問題意識に基づいたアンケート調査を行い、今後の廃棄物行政において分別・リサイクルのみならず発生抑制をも促進するための施策や PR 方法の方向性を考える基礎資料とすることにした。

2. 調査研究の体制と方法

野波寛氏(関西学院大学社会学部講師)、福岡雅子氏(㈱地域計画建築研究所)の指導・助言と豊中市環境事業部の協力を得、「環境配慮行動の規定因モデル」(註)を参考に立てた下図の仮定に基づくアンケート調査を行った。

- ・対象…1624 世帯(住民基本台帳から無作為抽出)
- ・返送数…726 通(返送率：44.7%)

(註) 広瀬幸雄、1995、「環境と消費の社会心理学ー公益と私益のジレンマ」、名古屋大学出版会

3. 調査結果の概要

ここでは地縁的つながりとしての自治会と、自発的つながりとしてのサークル活動を取りあげ、それぞれに関わる人たちの意識・行動を紹介する。

① 自治会

自治会の監視・規制力から生じる規範意識が作用するという仮定に反し、未加入者の方が加入者より自分の出したごみに対する近所の目を気にする傾向にある。加入者は分別の手間を厭わず、有料化・ごみ袋への記名に肯定的で、具体的な設問に高い意識をもつ傾向がある。行動面では、加入者の方が未加入者より実行度が高いとは言えない。再生品の購入、ペットボトルの分別排出の実行度は加入者の方が高いが、詰替え式商品の購入は未加入者の方が高い。

② サークル・ボランティア活動

概して参加者は未参加者より高い意識を持ち、有料化、ごみ袋への記名に肯定的である。行動面でも参加者の方が未参加者より実行度が高い。

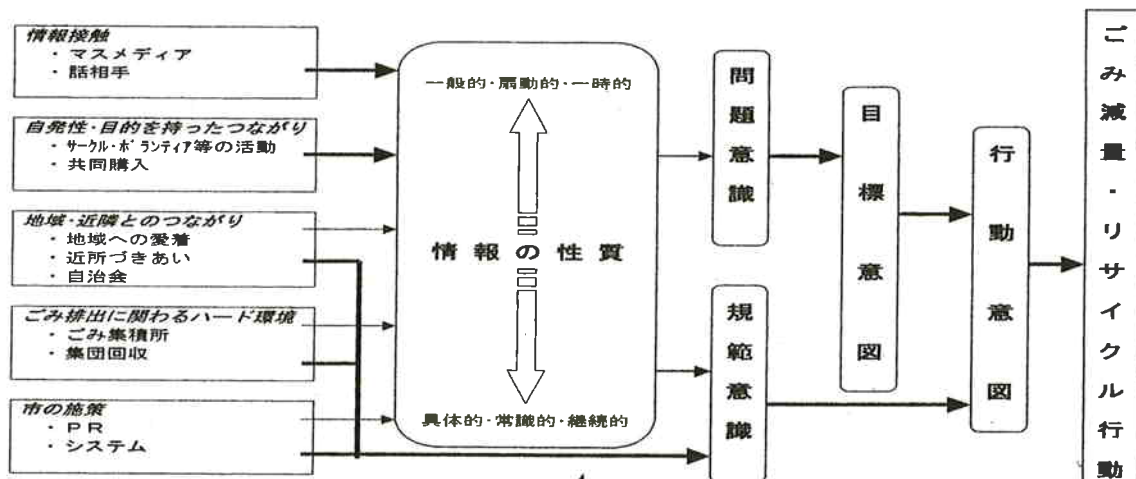
4. まとめと今後の課題

平成 12 年度の調査は、地域におけるつながりと、そのつながりを持つ人がごみについてどのように感じ、行動しているかの把握にとどまった。

予想に反し、近隣とのつながりがもたらす規範意識の影響は小さかった。一方、サークル・ボランティア活動等の参加者は高い意識を持ち、熱心に行動していることが分かった。

今後因子分析等析を進め、意識と行動の関連を掴みたい。また、ヒアリング調査等を行い、それぞれのつながりが持つ可能性や、つながりのない人に対する働きかけ方について探る必要がある。(村上)

人・情報・もののつながりと意識・行動の流れ図



平成 13 年度(2001 年度)自主研究

セーフティーネットの張り方はどうあるべき？

セーフティーネットとは元来サーカスで空中ブランコを演じる役者が、万一失敗して落ちてでも死んだり怪我をしないために用意する安全網のことですが、今回の研究テーマで扱うのは、病気、貧困、失業などの出来事に備える所得保障政策や福祉政策という意味でのセーフティーネットです。

行政が担うものには健康保険、介護保険、年金保険、雇用保険、身体障害・高齢・児童福祉等さまざまな網があり、これらの網でも憲法でいう健康で文化的な最低限度の生活を営めなくなった時に生活保護という最後の網があります。去年から始まった介護保険制度や、年金・医療制度の給付の見直し、社会福祉サービスの応能負担から応益負担への転回、倒産やリストラの進行などにより生活保護の網の重要性は今後も増加することが見込まれます。

しかし、自分のケースワーカーの経験からも生活

保護に対する世間の目というのは厳しいものがあり、要否判定の際に資産調査、扶養義務調査もされることで網が岩のように見えたり、制度を知らないで網が透明に見え、生活保護以下のレベルで生活している人も相当数いると推測されます。

一方、他の社会保障の網も所得に応じた保険料、サービス利用料が社会保険や福祉サービスで設定され、網から落ちないように工夫がされていますが、財源的な制約もあり様々な歪が生じています。

これらの複雑に張り巡らされた網の構造を分析しながら、豊中市が抱えている課題を把握し、改善できる方法を探っていきたいと思います。進捗状況はできる限りホームページなどで発信していくつもりなので自分の仕事に関連する人やまったく関連がなくても興味を持ってくれた人、是非ご意見ください。
(弘中)

平成 12・13 年度(2000・2001 年度)共同研究

千里ニュータウンの暮らしの変化とまちづくりに関する調査

調査結果を課題解決に向けたプラン作りに

【調査目的及び方法】

開発後 30 年を経過した千里ニュータウンは現在、市民生活の変化に対応してハード・ソフト両面からの更新・見直しの時期に来ている。既に千里に関する多くの調査がなされており、課題はかなり明らかにされているが、それらの課題をいかに克服するかという視点での結論(社会的合意)が出されていない。課題解決に向けてのプラン及びしくみを考える際、行政サイドの独り善がりにならないよう生活者である住民の生活実態からくる問題意識を反映した解決策を立てることにした。調査にあたっての具体的な着眼点としては、①日常生活圏での生活環境(1)公園・緑・歩行者道、(2)買い物、(3)医療、②地域のつながり、交流と社会参画の可能性、③子育て世帯にとっての千里ニュータウン、④高齢

者の自立した生活(外出行動を中心に)とし、①郵送によるアンケート、②訪問インタビュー、③中間報告と意見交換会(2/18)などを通じて住民個々の具体的な生活像や意識を詳細かつ広範にとらえようと努めた。いわば生活者の視点に立って、千里ニュータウンの問題点、課題点を探ろうという趣旨であった。

【今年度の課題】

平成 13 年度は、既存の調査から指摘されている千里ニュータウンの抱える課題に、12 年度調査で得られた生活者の視点を織り込み、克服すべき設定し、具体的な検討へと入っていくことにしている。

(太原)

新・旧スタッフメッセージ

平成13年(2001年)4月1日付でスタッフの交代がありました。藤家(研究員)が市(商工労政課)に復帰し、川手、山下(事務局)が退職しました。研究員として高齢福祉課から弘中を、事務局に平尾、洲浜を迎えました。

研究は永遠に…スタッフは変われども

研究所に有馬さんの後任で着任し早くも3年が過ぎ、平尾さんに引き継ぎました。財政危機にも係わらず市のバックアップで何とかやってこられたのも理事長をはじめとする理事、専門委員、研究所職員、市職員、市民の協力のおかげと感謝している。

市が抱えている問題は山積しているが、研究員はじめスタッフが一団となってその解決のための研究に取り組んでほしいと思う。市民と職員の参加は、研究内容をより高め、実効をあげるためにも是非とも必要だ。人は変われども、研究は永遠です。みんなで頑張ってください。(川手)

貴重な3年間をありがとう

市役所という組織を外から見ながら外部の方々と研究するという貴重な3年間に感謝しています。市の立場を離れ、豊中市民といかに対話するか……という試行錯誤でしたが、市政研セミナーや研究過程での市民との意見交換会など、いくつかの試みは始まりました。設立5年目を迎え、いよいよ充実していく時期に市政研を離れるのは残念ですが、市の立場から市政研を見ることでできる応援もあると思います。健闘を祈ります。(藤家)

道は^{むこ}険しい

みなさま、ご無沙汰しております。この3月末に研究所を辞して、現在は土木関係の仕事に就いています。

離れてみて思うのは、恵まれた環境だったということ、多くの人々に支えられていたことに気付いていなかったこと。温かく見守って下さった研究所の皆様やご支援下さった皆様に、厚くお礼申し上げます。

これから先は、社会の厳しい現実と向き合っ^てしごとく強く生きていきます。一段と成長した私の姿を見ていただく日がいつか来ることを願っています。

最後に、市政研究所のますますのご発展をお祈り申し上げます。(山下)

雨にもまけず!

大阪にUS Jがオープンして早くも3ヶ月。テーマパーク大好きな私としては、年間パスを購入していつでも行けるようにと万全の体制です。先日、雨の中出かけて行くと、黒山の人・人。ジュラシックはすでに2時間待ち、ここに来ると本当に不景気なのかと思います。けれども、こんな事には負けてはいられません。「雨にもまけず、夏の暑さにもまけず、黒山の人にもまけず、いざUS Jへ!」小雨の日にお出かけの方は、カップを持って行くことをおすすめします。(フットワークも軽くて動きやすいですよ。)

(M)

平尾 和(事務局長)

37年間の市役所生活を経て、4月から勤めています。直近の職場は人権文化部、市民社会の中にある差別の実態と差別の現実を区別しつつ、両者の解決を目指すという見方の大切さを感じ始めたところで「卒業」。その前がこの研究所の立ち上げ担当の企画調整室で、再度のスタートという感じです。研究所のカタチも前走者の努力で一応(一定でなく一応、これは大久保理事長の指摘)できていて、私の手にバトンが馴染むのに少々の時が掛かりそうですがよろしくお祈りします。

弘中 伸明(研究員)

4月に高齢福祉課から市政研究所に転出してきました。庁内人材公募の初めての対象職員に選ばれた重圧感を4月初友人に話すと、「あんなやつでも選ばれたんやからって後が続きやすいからや。」と言われ、ちょっと気が楽になりました。ここに来てもう3ヶ月ですが、市役所時代に自分の担当業務以外の知識を積極的に吸収してこなかったつけは大きいなと感じています。これから色々な情報発信や問題提起をしていきたいので是非意見や感想を聞かせて下さい。

洲浜 智美(事務局)

山下さんの後を継ぎ、4月からデータバンクの担当をしている洲浜です。

研究所のメンバーは6名と少なく、今まで大人数の図書館で働いていた私には戸惑いもありました。しかし、そんな考えはすぐに消えてしまいました。職場の皆さんに恵まれ、今はとても楽しく仕事をさせていただいています。

これからの目標は、コンピューターを用いてより良い資料づくりをする事です。まだまだ勉強中ですが、一歩ずつ進んで行きますのでよろしくお願い致します。